

## [COMMUNION]

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.html>E-mail: [comm.tko@nskkn.org](mailto:comm.tko@nskkn.org)

PHONE: 03-3433-0987

PHONE: 03-3433-8678

FAX: 03-3433-8678

Diocese Office



## 《イースターメッセージ》

## 生き返ったタビタ

司祭ドミニカ 朴美賢



「復活おめでとうございませう！ イエス様は復活しました。喜びましょう、イエス様と共に私たちが永遠の命に復活するようになりました。」この挨拶で、復活メッセージは充分と思いますが、私たちの隣には、戦争と災害、差別などで、今も苦しむ人々がたくさんいます。この人々にもイエス様の真の命と希望を頂く復活になりますように願います。そのことを含めて、使徒言行録9章36〜43節のペトロの奇跡により、イエス様に生き返らされたラザロのように、死から復活したタビタについて分かち合いたいと思います。タビタは死から生き返ったという驚くべきことだけではなく、他にも多くの重要なことも私たちに語られています。

36節をみますと、「ヤツファにタビター（アラム語のこの名をギリシア語に）訳して言えばドルカス、すなわち『かもしか』——と呼ばれる婦人の弟子がいた。彼女はたくさん善い行いや施しをしていた。」とあります。このみ言葉から私たちは多くのことを想像することができます。まず、タビタは聖書の中で唯一弟子と呼ばれた女性です。12弟子が男性なので女性には司祭になれないと主張する人がいますが、聖書は本当に弟子を性別で差別するのでしょうか。ルカによる福音書や使徒言行録でイエス様は弟子について教える時「ディアコネオ（仕えるという意味）」を使います。また、イエス様は、永遠の命を得るにはどうしたらよいかと尋ねられ、「持っている物を売り払って、貧しい人たちに分け与え、わたしに従いなさい」（マルコ10：17〜22）と教えます。つまり、イエス様の弟子としての要求は、「分

かち合いと仕え」だと思いません。そして、たくさん善い行いや施し、数々の下着や上着を分かち合ったタビタこそ、イエス様の弟子ではないでしょうか。イエス様の復活を初めて知らせたマグダラのマリアも、私たちは知っています。

二つ目、タビタは自分の名前と呼ばれます。聖書で女性が書かれる時、匿名になったり、誰々の娘、夫人と記されることが多いのですが、タビタは自身の名前と呼ばれていることは、彼女はやもめであった可能性があります。そして、このやもめは、テモテへの手紙15章9〜10節とローマの法によれば、独りで暮らす女性たちを指す言葉であると同時に、教会に登録される職分でもありました。

三つ目、聖書で女性の名前が記される時でさえ、大部分は名前だけが、簡略に記されるだけです。タビタは名前だけでなく彼女の働きが詳細に記されています。この記述の詳細さから、タビタが初代教会の中でどれほど重要

な人物であったかを想像することができます。特に、タビタは旧約聖書時代から異邦人たちと物流・交易が活発であり、異邦人宣教のためにも重要だったヤツファの地で、たくさん善い行いや施しをしたことは、タビタが使徒たちと共に初代教会の宣教のためにどれほど活発に活動していたかを想像することができます。

そのタビタが亡くなりました。そして、その悲しみの中でも希望持つてペトロを待つやもめたちが居ました。タビタにも、ラザロにも共に苦しみ、悲しむ人々がおりました。私はこれが大切だと思います。

今、復活を向かえた私たちは、苦しみ、痛み、差別の中にいる隣り人の叫びを聞いているのでしょうか。今、弟子として私たちは復活の喜びを真に分かち合っているのでしょうか。復活の永遠の命、救いを分かち合うことが出来る私たちになりますように。（沖繩教区名護聖ヨハネ教会）

## 2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ

昨年11月に山梨県清里・清泉寮で、「いのち、尊厳限らないもの」となりびととなるために」を主題テーマに日本聖公会宣教協議会が開かれ、すべての教区主教をはじめ各教区代表、管区諸委員会など信徒・教役者132名が集まりました。そこで話し合われた内容に即して、「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」が2月2日に発表されました。



コールコミッティ議長

山野 貴彦

2023年日本聖公会宣教協議会は波乱の結末となった。この協議会がモデルとするランベス会議や1995年および2012年に開かれた日本聖公会宣教協議会と同様、協議会の内容に即した呼びかけ文が会期の最後に発出される予定であった。しかし、期間中に行われた様々なプログラムは、一つ一つは素晴らしかったものの全体としてのまとまりを欠き、最終日に何かが決議・発出されるのは不可能であった。最終日の全体会は紛糾し、コールコミッティ(当時はドラフトコミッティ)が課題を持ちかえり、あらためて協議会の内容と参加者各位の意見を精査して呼びかけを作成・発表するということで終結した。

これを受け、コミッティは2023年11月29日、12月7日、13日、19日、2024年1月30日の合計5回の会議を実施して意見交換を行った。一定の同意が成立するまで議論が続いたため、すべての会合が予定時間をはるかに超過する長いものとなった。重視されたのは、①宣教協議会において出された様々な声にもう一度耳を傾けて神学的に考察する、②2012年の提

言をあらためて確認し継続性を意識する、の2点であった。それは必然的に、聖公会が大切にしている・してきたものを直接間接に表現することにもなる。コミッティは上述の日程で詳細に議論をくり返した。そうして2024年被献日に発出されたのが「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」である。

「ここからまた歩きはじめよう」は、2012年宣教協議会以降全体的に見れば明らかに教勢を落としている日本聖公会が11年ぶりの協議会を経て、再び歩み出すことが呼びかけられている。「いのちに仕え、となりびととなるために」の「いのちに仕え」は前協議会を踏襲したもので、この世界の一つ一つのいのちに向かい合い仕えることを志すものである。「となりびととなるために」は、上段に構えて「困っている人たちのとなりびとになってやろう」という意味ではなく、いのちに仕える中で与えられた出会いに自らもまた応答することを指す。

呼びかけの軸としては、参加者の多くの声に聞かれ、また、実行委員長磯晴久主教の演説の中でも語られた「神と人」「人と人」「人と被造物世界」の観点が選ばれた。聖公会神学の基本的要素の一つである創造論を踏まえた適切なものと思われたからである。この

ことは、コミッティの各人の働きの場で常に意識されてきたことでもある。宣教協議会后もう少し長期の議論の時間があればなお良かったが、比較的短期間で文言がまとまったのはそのゆえのことである。

各項目についての詳説は今後も発信される予定であるが、いずれにせよ、呼びかけ文は抽象的な表現に見えるであろう。それは、日本聖公会の教会・施設・機関にはそれぞれの歴史や務めがあり、具体的な表現にすれば、あるところでは有効であっても、あるところでは意味を為さない、ということがありうるからである(同様の傾向はランベスコールにもある)。しかし、それは理念を並べてお茶を濁したということではない。呼びかけの文言は、各々の活動の中で必要だと思われる部分、欠けていると思われる部分が認識され、国内外の聖公会の交わりの中でそれが満たされてゆくための指針として用いられることが期待されている。

今回の呼びかけは、それぞれの宣教の場において、わたしたち一人一人が自分ごととして捉えることで意味が形成されるものとなっている。それぞれの教区においてもこの呼びかけが「一部の人々が作ったもの」ではなく、日本聖公会の今後の指針の一つとして共有されることを願ってやまない。

## 2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ

ここからまた歩きはじめよう

～いのちに仕え、となりびととなるために～

1. 神の み声に耳を傾けよう
2. 人々の声に耳を傾けよう
3. 世界の声に耳を傾けよう

私があなただを選んだ

司祭 荻原 充

2024年1月6日(土)  
三光教会にて司祭按手の恵みに与ることができました。東京教区のみなさまお一人おひとりのお祈り・お支えに大変感謝しております。

司祭按手前の個人黙想において、わたしはキリストの奉仕者としての司祭の務めとはいったいどのようなものなのかについて思い巡らしながら按手への準備のときを過ごしていました。生きておられるイエスを現わす、目には見えない現存を目に見える形にする務めをどのように自分が担うことができるのか。イエスについて語るのではなく、イエスと共に自分は語る事ができるのか。キリストと離れることなく、キリストとの一致のうちに務めを行うことができるのか、このようなことを思い巡らしていました。

そのような中で、ヨハネに

よる福音書15章16節「あなたがたが私を選んだのではない。私があなただを選んだ」というみ言葉が目にとまりました。わたしは、自分の力や努力でどのようにして生きてお



る古い革袋に新しい酒を入れるようなことになるのではないのか。わたしの力によって司祭にふさわしい者となるのではなく、自分が至らない所や欠けがあるうとも、キリストに呼んでいただいた者として応えていけばよいのだと思うと、少し力が抜けて、地に足がつかなくなる感覚を覚えました。

られるイエスを現わすことができるか、イエスと共に語ることができるか、キリストと自分をどのように一致させることができるのか、と考えていたような気がしました。しかしそのような考えは、いわ

司祭按手後、聖餐式を司式させていただくようになって、キリストとの一致を感じる恵みが与えられているように思います。「これはあなたがたのために与えるわたしの体です」「これはあなたがたおよび多くの人のために流す新しい契約の血です」と唱えるたびに、ご自身の体と血、すなわちご自身のすべてをわたしたちに与えてくださるキリストの大きな愛を感じます。同時に、わたし自身の体も血も、全てをみなに与えるようにと招かれて、大きな責任がわたしに与えられていることも感じています。

《北関東教区・東京教区 宣教協働特別委員会》

交わりの時を豊かに

司祭 須賀 義和

北関東教区と東京教区の宣教協働が始まって3年。新教区の設立を目指してお互いを知り合う機会を豊かに持ちたいと願います。様々なプログラムが企画されていますので是非ご参加ください。

「教会巡礼企画」

北関東と東京の教会を相互に訪問しあう企画です。コロナ禍の中、人数を制限しながらの実施から始まりましたが、コロナの5類への移行を受けて相互訪問も活発になってきました。

直近では双方の教区から約20名が参加し前橋聖マツテア教会に訪問し、近隣にあるプロテスタント、正教会、カトリック教会を訪ね、豊かな交わりと学びの時となりました。今後は聖マルコ教会と滝乃川学園、また、宇都宮聖ヨハネ教会への訪問が予定されています。

「スタンプ帳」

巡礼企画は宣教協働特別委員会の企画だけのものではありません。友人同士、あるいは個人で、いろいろな教会へと訪問していただき、相互に交わりを深めていってほしいと願います。

そのために、宣教協働特別委員会では御朱印帳ならぬスタンプ帳の作成を企画しています。各教会に訪問ごとに教役者のサイン、または教会のゴム印あるいはスタンプ帳用紙に作成された特別なスタンプなど教会ごとに多様な対応になると思いますが、スタンプ帳を活用してもらえればと思います。

「趣味でつながる」

「鉄道」「自転車」「教会音楽」など好きなものを同じにする人たちがつながっていくというものです。

「鉄道」ではzoomによるミーティングで深いところまで話し合ったとのこと。好きなものをきっかけに信徒個人同士が出会っていきこうとする企画です。

## 追悼 司祭 山野 繁子師

司祭 上田 亜樹子

マリア山野繁子先生の歩いてこられた道を振り返るとき、大切なのは先生の生涯をほめたたえることではなく、そのご生涯にずっと神さまが働かれていた、その足跡を見ることだと思います。そして山野先生と出会ったわたしたちは、単に「わかって良かった」ではなく、先生を通じて知った愛と慈しみ、神さまの姿を、毎日の生活の中で生かし、実行していくことが課せられていると思うのです。大切な方を失うことは辛いですが、そのつらい出来事を通して魂が成長し、未熟だった「心の門」が、少しかだけ開くこともあるでしょう。

山野先生はとても頑固なところがありました。同時に少女のように、そして正直に、弱音を吐く方でした。私よりはるかに繊細で、勉強が好きで、そしていろいろな差別や社会構造、ことにアジアにおける力関係について意識が高い方だったので、世の痛みや辛さの中にある人々と出会ったとき、山野先生ご自身の心も刃で突き刺されるようだったのかもしれないと思うのです。

「自分の心のままを行うためではなく、わたしを遣わされた方のみ心を行うためである」と、葬送式の福音

書にあるように、イエスさまがこの世にいられた理由は、いわゆる「人生を謳歌する」ためではありませんでした。でも、神さまがお造りになられたわたしたちもまた、「神さまのみ心を行う」と言いながら、実は自分にとって都合のいいことを「神さまのみ心」と思い込もうとするなら、結局は自分の心のままを行う範疇を出ないのでしょう。そんなときは、まず自分が傷つかない道を選び、次に皆の期待に応え、喜びがちな道を選びがちです。

しかしそうではなく、神さまのみ心を行おうとすると、それはもう疲れて弱音を吐きたくなることもある、また、喜びが見えず、確信も持てず、さらに自分は人生の迷子になってしまったか、と不安に包まれる時もあるでしょう。もしかしたら山野先生も、華々しいキャリアの背後で、そんなときがあったかもしれません。しかしそれでも山野先生は、山野先生のやり方で、少女のように、率直に神さまの前に立とうとし、何よりも神さまのみ心を全うしようとされた。その純粋で正直なご生涯に感謝します。



## 消えない炎 — 山野先生のこと —

東京諸聖徒教会 榎谷雪

2013年3月31日発行のコミュニティオンに、退職に際する山野先生のメッセージに添えられた先生の写真がある。山野先生が諸聖徒を去られてから、ずっとわたしの手元に置いて、事あるごとに話しかけてきた写真だ。写真の中の先生は、祭壇をバックに白いキャソックスを着て、きりつとした表情でこちらを見つめている。

わたしは山野先生から洗礼を受けた。先生は、娘が諸聖徒幼稚園の年長のときに、チャプレンとして赴任された。先生とは、幼稚園の保護者向けの

の聖書の会や、娘に付き添って参加した日曜学校でお目にかかるだけであつたが、いつしか、この人についていきたい、なぜだかよくわからなけれど、とにかくついていきたい、そう思うようになった。

山野先生と過ごした日々は決して長くはないが、教会の談話室で交わす何気ないおしゃべり、わたしの拙いオルガンの練習をさりげなく見守

り聴いてくださったこと、どんな質問にも真摯に答えてくださったこと、優しい声で語る難しいお説教…先生との思い出の一つ一つが、わたしにとってかけがえのないものだ。

あるとき、わたしが前任者から引き継いではじめて担当した日曜学校のクリスマス礼拝案内の文案をご覧になって、「献金は恵まれない子どもたちに：」の「恵まれない」という表現が適切でないことを指摘されハッとさせられたことがある。東京諸聖徒教会の教会報にも、\*速さ、強さ、便りさ、快適さというような「価値」ではなく、豊かな自然と文化、人々のいのちを何よりも大切な価値とする社会の創造を、という山野先生のメッセージが遺されている。先生は、常に社会の中で弱くされた人々の視線に立って、しかもそれが自然体で、さりげなかった。

ゆらゆら揺れる炎を見つめていると、ホッとすることがある。ずっと見ていたくなる。ときには明るく優しく照らし、ときには赤々と燃え上がる。山野先生は、そんな炎のような人だった。その炎はこれからも、先生と出会ったわたしたちの心の中で、決して消えることはない。

\*東京諸聖徒教会教会報『礎』No.92

(2011年6月26日発行)より

## 教会談話室

浅草聖ヨハネ教会

太田 慈美

コロナで休止していたフェロシッパンチ（主日礼拝後の手作り昼食）が、新しい形で昨年5月からスタート。

第3主日の礼拝後、「初めてヨハネ教会にいらっしやった方をWELCOME♡する」というコンセプトの「ウエルカムアワー」では、美味しいランチを一緒にしながら、数名の新しい方と楽しい交わりの時間となっています。

東京聖十字教会

ここ数年管理牧師体制の下、毎主日の礼拝は20人前後の少ない人数ではありますが、一つの家族のような温かい空気が流れています。コロナ禍で始めた礼拝のZoom配信、Instagramも定着しています。昨春秋より月2回、礼拝後にお茶会の時間を設け、少しずつですが、以前のような信徒同士の繋がりが復活し始めています。

渋谷聖公会聖ミカエル教会

定住牧師のいない教会が増える中、今日の日本社会にあつて、信徒の養いと福音宣教を担う教会の本来の機能を維持することができると新たな形態として、教会のグループ化とチームミニストリーを想定し、その準備のための信徒奉仕職、更には特任聖職の育成を模索している。そ

の第一歩は信徒も宣教を担うものとの意識変革にあると考えている。

東京諸聖徒教会

多くの方々に助けられて「諸聖徒ごども家」が完成してから、早1年が経ちました。2階で始まった学童保育は手狭になったため1階に移り、2階では4月から放課後等デイサービスが始まりました。教会がどう関わっていけるか楽しみにしつつ見守っていきたいです。

また、新しい建物の効果か(?) 礼拝出席者が増え、3月に4人の堅信受領があります。

阿佐ヶ谷聖ペテロ教会

八木 達郎

鈴木裕二司祭が1月14日をもって教会を去られ、管理牧師の卓志雄司祭や環状グループの立教のチャプレンの方々に援けられ、み言葉の礼拝を交えて主日礼拝を守っています。4月1日からは金大原司祭が管理牧師になられます。聖歌は入堂、奉献、退堂の3曲、愛餐会は月2〜3回くらいです。来年初立100周年を迎えるので、記念企画等準備に入っています。

清瀬聖母教会

今年も庭の梅の蕾がほころび始めました。清瀬市鳥、オナガも庭に遊びにきます。

昨年夏から愛餐会が再開。コロナ禍で使われなくなっていたマリア館に、笑顔と笑い声が戻ってきました。夏はバーベ

キュー。秋には恒例の芋煮。クリスマス会の祝会も盛大に行われました。主教巡回日となったクリスマス礼拝では3名の子どもたちが堅信礼を受け、教会中が喜びで満たされました。

聖ルカ礼拝堂

5年にわたる改修工事が終わりチャペルでの礼拝が再開して早1年、子どもクラスもようやく再開、聖ルカ礼拝堂は驚くほど賑やかな大斎節第1主日の礼拝を迎えた。教会の先行きを案じることの多い中、希望の光。教会は建物ではなく人の集まりであることを心に留めつつ、今や跡形もない臨時チャペルで守った祈りの日々の恵みに、今あらためて感謝。

真光教会

町田市の真光教会です。神奈川県でなく東京都です。「まひかり」でなく「しんこう」です。

江東区深川西元町で生まれて移転すること数ヶ所目であり、最初と名前が違うとしても、誰が何と言っても東京で一番最初の日本聖公会の教会です。来年初2025年に創立150年を迎えます(実は本年2024年は現在地で50年です)。ついでに言う和管理牧師体制11年目に入りました。

三光教会

社会宣教委員会

三光教会のマーマレード作りは2001年2月が始まりました。20数年前、心の病を負った青年が礼拝に参加

青年たちとよい交流をしていましたが、1999年12月急逝。ご家族からの献金で彼を記念する夏みかんの木を植えました。マーマレードの収益は、精神障がい者支援に使うことを決めて今日至っています。今年も沢山の瓶詰を並べ感謝でした。

聖愛教会 「聖書読書」

大斎節第3主日から11週間、聖愛教会では「聖書読書」を行っています。これは、各自、家庭で「創世記」を毎週4〜5章ずつ繰り返し読み、黙想し、司祭の用意された問題シートを解き、次の主日に渡される問題シートの手掛かりとなる資料で、さらに聖書への理解を深めるという手法です。「聖書読書」を通して豊かな恵みの時間になりたいと思います。

目白聖公会

目白聖公会の信徒にとって大切な祈りの場である「聖シプリアン聖堂」。足を踏み入れると美しいステンドグラスに目を奪われるが、これは英国の修道院から寄贈されたもの。信徒以外にも、近隣の方々が会衆席で静かに佇む姿もめずらしくない。2029年に聖別100年を迎えるが、私たち信徒はこの聖堂で捧げる祈りで世界を輝かせたいと願っている。

聖パウロ教会

阿部 基裕

礼拝・イベントは対面形式に戻ってきました。バザー、降誕日前夕キャンドルサー

ビス、主日礼拝のチャント、大斎講話、そして今年は管理牧師の高橋主教様司式の受苦日礼拝など、聖なる3日間の礼拝が当教会で行われる。主教様による7つの説教。主イエスの受難と復活が「私の記念としてこのように行え」との御言葉とともに間近に迫る。

#### 神田キリスト教会

神田では、5月23日木曜日19時から「ロレンツォ・ギエルミパイポオルガニリサイタル」を催します。今回はギエルミ氏お家芸のイタリア物と、演奏楽器と相性の良いドイツの曲が聴ける、楽しみなプログラムとなっております。席数は120、響きの良い前方の席からご予約受付中です！入場料3000円。電話03(3251)4981教会まで。ご来聴をお待ちしています。

#### 聖マーガレット教会

イースターの商用利用が増えた「おかげで」、日本でもイースターの知名度が上がってきました(ディズニー・イースター、ハッピーターンイースターMix、etc)。「教会でもイースターやるの?」と言われないうちに、聖マーガレット教会は今年イースター・フェスタを開催し、教会の外の人たちを招いて共に復活日を祝います。

#### 聖救主教会

聖救主教会は「行う人になりなさい」という聖書の言葉を実践する場として、

まこと地域総合センターを運営してきました。0歳から104歳の方々が利用しています。4月には新しく「深川えんみち」が富岡八幡宮の敷地内で始まり、高齢者施設「デイケア」と「ライト学童保育クラブ」が子育て支援の「こころ」と共に地域に繋がります。どうぞ、いらして下さい。

#### 東京聖テモテ教会

東京諸聖徒教会との協働から始まった「やよいちゃんち」(親子の居場所作り)、東京子ども子育て応援団のご協力の下行っている「フードパントリー」もすっかり定着してきました。また、コロナ禍に中断していた夜の聖餐式は青年を中心に再び再開!昨年婦人会を解散し、心機一転「おしごと会」と称して教会の整理整頓や期節の準備を皆で楽しんでいる。

#### 聖アンデレ教会

藤波 勝久

聖アンデレ教会ではボーイスカウトを通じて、地域の子供たちと一緒に教会で活動をしています。コロナ過でも子供の数は増え現在37名います。最近は高校生が社会奉仕のプロジェクトとして、「聖堂の扉塗装」を企画から実施まで行い、信徒からも大変感謝されました。昨年



修繕前



修繕後

創立50周年を迎えたボーイスカウト活動を今後も支援していきたいです。

#### 八王子復活教会

宣教チーム

「讚美と祈りのつどい」

毎月第1金曜日19時から40分程悩み、苦しみの中にある人たちのため、また教会につながる方々を思い、静けさの中で神様と対話する祈りの時間。共に支え合い、聖霊の導きによってみこころを求めていく。その時、そこに集まった友と共に、今ここに創り出す生命の空間。形式にとらわれない自由な新しい試み。どなたでもどうぞ。

#### 葛飾茨十字教会

蘆田 信裕

「小さな名画展」「名画と語ろう」

宣教新企画「小さな名画展」と「名画と語ろう」会をはじめました。「小さな名画展」は聖書に親しむことを狙いとした名画展示コーナー。「名画と語ろう」会は当日発表される1枚の名画を囲んで自由に感想や意見を述べあう笑いの絶えない集まりです。詳しくは葛飾のホームページおよびYouTubeをご覧ください。チャンネル登録と高評価、拡散お願いします!

#### インマヌエル新生教会

2019年に環状教会グループの3教会(池袋聖公会、東京聖マルチン教会、練馬聖ガブリエル教会)が合同して創立された、東京教区で一番新しい教会。会衆席から十字架が青い空の中に見える礼

拝堂(2021年完成)は「インマヌエル(神我らと共にあり)」を体現する。「新生」には、3教会が一つとなって新たな宣教を目指すという意味が込められている。

#### 立教諸聖徒礼拝堂

兼子 崇志

#### 青春の眩暈

先日、チャペルジャーナル『レンガと蔦』が無事終了しました。コロナ禍で会衆の交わりを保つために始めたこの雑誌は9号を迎え、チャペルの活動の一環として定着してきた感があります。今回、新しい試みとして、学生キリスト教団体から原稿をお寄せ頂きました。深夜、編集作業をしていると、彼等の青春の瑞々しさに私は眩暈を覚えたものです。

#### 聖パトリック教会

聖パトリック教会は、ひと言で言うなら「ひとつの家族」のような教会です。主日には、25〜30名ほどの方が集い、感謝と賛美をもって礼拝をおささげしています。世代や考え方の違いを互いに受け止める、包容力の豊かな教会です。月に一度の「子どもたちと共にささげるみ言葉の礼拝」では、子どもたちが代祷をささげ、豊かな時となっております。

#### 神愛教会

12月24日は日曜日だった事もあり、主日礼拝とイヴ礼拝の間に「こどもクリスマス」を行った。

12月25日のクリスマス礼拝は14名の出

席。初めて教会の礼拝に出席された方もいて、温かなクリスマスとなった。

一昨年より「ひぐらしの会」を行い、教会の課題について、ざっくばらんに意見交換を続けている。

#### 月島聖公会

2023年は12月31日が主日だったこともあり、大晦日に「主イエス命名日」の礼拝を行った。毎週日曜日の8時半からの「こどもリースペース」は好評で、20名弱の親子が集まり、中には礼拝の時刻（9時45分）に合わせて駆けつける家族も。昨年から再開した「ほっこりごはん」も、前回は50人前のカレーが空になる盛況。そして引き続き、「これからの月島」についての協議も続行していく見込み。

#### 千住基督教会

常磐線南千住駅から徒歩5分ほどの下町の住宅街にあり、106年続く教会です。主日は10〜20人で守る小さな教会ですが、活発な活動を続けています。主日は月2回の子育て世帯への食材配布、子ども音楽教室などです。小さなパイプオルガンの響きが毎主日に聖堂を満たします。この1年でお二人が新たに受聖餐者として加わってくださいました。

#### 聖マルコ教会

2月4日は八王子復活教会で合同堅信式、合わせて6名が堅信の恵みに与りました。高橋主教の『信仰生活』の説教に心を新たにされました。神さまからの呼

びかけの声に気づき、耳を傾けていくことが出来ますようにと祈りました。式後は、心づくしのお茶の時間。並んだケーキの美しさに目を見張り舌つづみ。温かい歓談の時にも感謝。(メイ記)

#### 東京聖三一教会

2024年1月より、聖堂（1961年竣工）の大規模な修繕が行われています。屋根や外壁部分を中心にした改修工事です。3月末に完了予定で、復活日を

装い新たにした聖堂で迎える予定です。それに伴い聖堂内の様々な備品の整理、旧牧師館であるトリニティハウスの大規模清掃や境内地の清掃も実施していきます。

### 【主教エッセイ 東京タワーの麓】

## 他人は救ったのに、自分は救えない

十字架上のイエス様に、次の言葉が浴びせ掛けられました。「他人は救ったのに、自分は救えない」という言葉です。ところが、それを言っている当事者たちはともかく、これこそイエス様のご生涯、生き様を最も的確に言い表している、真理を突いているとさえ言える重要な言葉です。

イエス様のご生涯は「救えない」、即ち力不足ということではなく、「他人は救われるが、ご自分は救わない」ことに貫かれていました。イエス様のなされた事の全ては「人のため」「私たちのため」であり、「ご自分の得のため」ということを一切語っていないのが聖書であります。

だからこそ、イエス様は「今すぐ十字架から降りるがいい」と暴言を吐かれた時も、一向に降りる気配すら示されませんでした。それは「私は、あなたの罪を受け止め、あなたの罪と一緒に背負うからこそ決して降りない」と示されるべく十字架を手放されませんでした。更には「私の苦しみと死によって人々が神様の者となるのだ。罪を持ちながらも、神様の中に人びとが居場所を、生きる場所を与えられるのだ。神様と一つになるのだ！」と、言葉こそ違うものの宣言されました。

これに先立ち、イエス様はゲッセマネの園で祈られましたが、あのお祈りは、「神様、どうかとんでも無い事が私の身の上に起こりませんように」「よりによって、あの連中の罪のために十字架に磔にされなくて済みますように」ではありませんでした。

その後、ゴルゴダの丘でイエス様は十字架上で釘と槍で刺され、舌は顎に付き、喉はカラカラといった極限状況に在ってさえも、「この十字架を自分のためではなく、人々のために背負うことこそ、まさに変わることも、薄れることも無い神様の御心なのだ！」とイエス様は確信し、引き受けられました。同時に、私たちの祈りが自分のこともさることながら、誰かの重荷、苦しみを、傷を私の十字架として背負おうとする心を自らの中に見出すことに繋がる時、まさに私たちもまたご復活のいのちの中に生かされている証を生み出していくことを祈ります。

イエス様の甦りを感謝し、お祝い申し上げます。

(主教 フランシスコ・ザビエル 高橋 宏幸)

## まことファミリーと「深川 えんみち」の働きについて 社会福祉法人聖救主福祉会

渡邊 淳也

聖救主教会とその関連法人である社会福祉法人聖救主福祉会（保育・介護）、NPO法人地域で育つ元気な子（学童保育、東京諸聖徒教会内『林町育成室』含む）は、普段はそれぞれ独立して事業を営んでいます。同時に「まことファミリー」を名乗る一体的な組織として、相互に助け合いながら長年ともに歩んできました。

また、その関係性は法人同士のつながりにとどまりません。教会信徒のみならず、保育園・キッズスクール・学童の在園児と卒園児家庭、高齢施設の利用者家族も含めて、私たちに連なる人々すべてを「まことファミリー」と捉えて、そのつながりをいまま大切にしています。

夏祭り、運動会、バザー、もちつき大会は、まこと保育園創立以来40年以上続くファミリー総出の四大大行事であり、

現在も地域の人たちもお招きして一緒に楽しんでいきます。

こうして地域とのつながりをはぐくむことができています。聖救主教会が端緒となつて100年以上にわたり積み上げてきた、この地での働きと信頼の賜物にほかなりません。

そうした中で本年4月にオープンする「深川えんみち」は、まさに私たちまことファミリーの力と想いを結集した新しい福祉施設です。聖救主福祉会は1階の「深川愛の園

デイサービス」と2階の「子育てひろば『ころころ』」を、地域で育つ元気な子は1階の「私設図書館エンミチ文庫」と2階の「ライト学童保育クラブ」をそれぞれ運営。地域の人も巻き込みながら、多世代がひとつの建物でも過ごせるように設計されています。深川えんみちに生まれ変わった建物は、もともとは昭和51年に建てられた幼稚園であり、近年は斎場として利用

されていきました。縁あって我々がそこを借り受けることになり、子どもと高齢者のための施設に改修するプランを決めたものの、理想の実現のためには特に資金調達面での高いハードルがありました。

そのブレイクスルーとなったのが、東京諸聖徒教会の「諸聖徒こどもの家」を設計した建築士・長谷川駿さんとの出会い、そして2021年に第1回が開催された日本財団の「みらいの福祉施設建築プロジェクト」のコンペへの参加でした。

長谷川さんが形にしてくれた深川えんみちのコンセプトと、我々の熱意あるプレゼンテーションが通じて、幸運にも助成決定事業のひとつに選ばれることになりました。その結果、建物の大規模改修や施設整備にともなう費用として約3億2千6百万円の助成金（のちの追加分含む）をいただくことができたのです。歴史ある街の新しい福祉拠点としての役割や、幼稚園と斎

場を経た「街の記憶」を引き継ぐコンバージョンのおもしろさなどが評価されたようです。建築資材と人件費の高騰などの影響で入札が思うようにいかず、工事スタートが延期を余儀なくされるなど紆余曲折があつたものの、いちど始まつてみれば工事そのものは大過なく進んでいます。2024年3月4日現在、施工検査を控えるなど、大詰めを迎えています。

「まこと地域総合センター」は1999年に竣工し、保育園と高齢者施設を合築した先駆けとして全国的にも知られていました。ですから、同様のコンセプトを持つ深川えんみちは、聖救主福祉会の創設者である故ヨハネ鈴木勉司祭の遺志を、現代に引き継いでいるとも言えるでしょう。

本稿をお読みのみならず、いつでも、まこと地域総合センターと深川えんみちに遊びにいらしてください。

深川えんみちのデイサービスは最大36人が、学童保育は最大120人がともに過ごす予定です。職員を含めると約180人がひと所に集まります。門前仲町駅から歩いて2分、深川不動尊の目の前という都市部観光地のまん真ん中で、こんなにも活気と可能性とに満ちた施設を運営できることに、我々はとてもわくわくしています。

深川地区のまことファミリー（愛の園は杉並と世田谷にもあり）が集う建物である

「まこと地域総合センター」は1999年に竣工し、保育園と高齢者施設を合築した先駆けとして全国的にも知られていました。ですから、同様のコンセプトを持つ深川えんみちは、聖救主福祉会の創設者である故ヨハネ鈴木勉司祭の遺志を、現代に引き継いでいるとも言えるでしょう。

本稿をお読みのみならず、いつでも、まこと地域総合センターと深川えんみちに遊びにいらしてください。

「教区時報コミュニケーション」スター号をお送りいたします。今年から記事の内容を少し変更し、新しく「主教エッセイ」と各教会からのお便り「教会談話室」を掲載することにいたしました。原稿依頼の手際も悪く、時間のない中、ご寄稿いただきまして、感謝いたします。今後とも、どうぞ宜しくお願い致します。

次回 夏号  
7月21日発行予定